

上尾市 小中一貫教育基本方針 【骨子案】



令和4年12月
上尾市教育委員会



1 方針策定の背景及び目的

(1) 方針策定の背景

ア 小中一貫教育が求められる背景

【 出典：埼玉県教育委員会「小中一貫教育推進ガイド」（平成26年2月） 】 ※一部抜粋

1 小中一貫教育が求められる背景

(1) 小・中学校での指導の違い

小学校から中学校に進学する際の接続が円滑なものになっていないことが考えられる。
⇒ 原因として、小・中学校間の接続期における学習指導、生徒指導の違いが考えられる。

(2) 児童生徒の身体的発達の早まり

児童生徒の発達について、6-3制が導入された昭和20年代前半と比較すると、例えば、平成22年のある学年の児童生徒の平均身長は、昭和23年当時の2、3年上級学年の児童生徒の身長に相当するなど、身体的発達が2、3年早まっている傾向が見られる。

2 全国的に見られる課題

児童が小学校から中学校へ進学する際に、新しい環境での学習や生活に移行する段階で、いじめや不登校等が増加するいわゆる「中1ギャップ」が指摘されることがある。

文部科学省の調査では「学習上の悩み」として「上手な勉強の仕方がわからない」と回答する児童生徒数や「暴力行為の加害児童生徒数」「いじめの認知件数」「不登校児童生徒数」が中学校1年生で大幅に増える実態が明らかになっている。

また、各種の調査によると、「授業の理解度」「教科や活動の時間の好き嫌い」について、中学生になると肯定的な回答をする生徒の割合が下がる傾向にある。

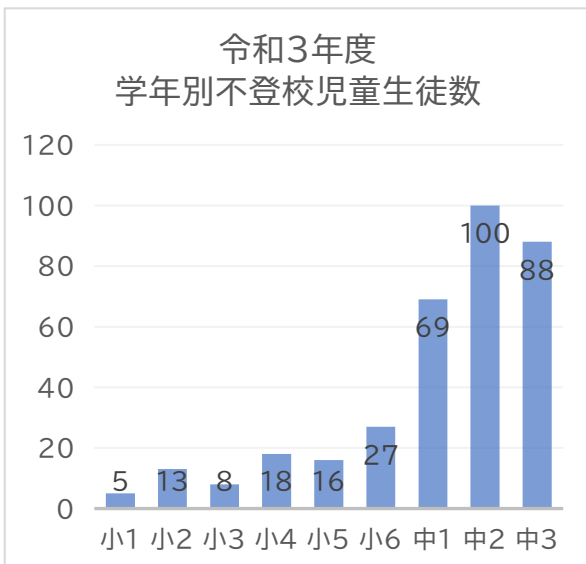
イ 上尾市におけるいわゆる「中1ギャップ」の現状

▲上尾市においても、不登校児童生徒数が中学校1年生で大幅に増えている。

▲「学校に行くのが楽しい」「自分で計画を立てて勉強している」「あきらめずにいろいろな方法で考える」等の項目において、中学生の肯定的回答が減る傾向がある。

< 参考 >

◎令和3年度 上尾市立小・中学校における
学年別不登校児童生徒数



◎令和3年度 全国学力・学習状況調査(上尾市)
児童生徒質問紙より（一部抜粋）
※肯定的回答をした児童生徒の割合

質問内容		小	中
1	学校に行くのは楽しいと思いますか。	90.3%	85.8%
2	家で自分で計画を立てて勉強をしていますか。 (学校の授業の予習や復習を含む)	75.6%	64.9%
3	算数/数学の勉強は好きですか。	68.9%	58.4%
4	算数/数学の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えますか。	85.1%	80.4%
5	新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校していた期間中、計画的に学習を続けることができましたか。	69.2%	37.8%

ウ 上尾市におけるこれまでの小中連携の取組と課題

上尾市においては、主に中学校区を基礎とした小中連携が図られている。

<主な小中連携の取組>

※令和3年11月に実施した「小中連携の実施状況調査」より

① 学習指導に関すること
○中学校教員が小学校を訪問する出前（出張・体験）授業の実施 ○中学生による小学生に対しての学習支援（長期休業中等において）の実施 ○小中合同の教職員研修会の開催（「学習指導」「生徒指導」に関する情報交換・グループ協議の実施）
② 生徒指導に関すること
○生徒指導連絡協議会の定期的（年2回）開催（生徒指導に関しての情報共有や情報交換） ○連携する小学校における中学生等による挨拶運動の実施 ○中学校教員による年度末の小学校授業参観の実施
③ 学校行事に関すること
○陸上教室や音楽鑑賞会、特別支援学級交流会などを通じた小中の交流 ○小学生による中学校の授業の様子や部活動の様子を参観する中学校訪問・見学会の実施
④ PTA活動に関すること
○小学校の除草活動への卒業生の参加
⑤ その他
○小学校6年生の担任と中学校教員による情報交換 ○小学校6年生児童に対する中学校説明会の開催

<小中連携の主な課題>

※令和3年11月に実施した「小中連携の実施状況調査」より

- 共通の課題として、日程調整が難しい。
- 情報を共有し合うには小中間における連携の回数が必要である。
- 出前授業などでは、事前に打合せが必要である。また、一部の児童・生徒のみの交流となる。
- 生徒指導連絡協議会が形骸化してきている。
- 年に一度だけ設定しているような取組を行うだけでは、交流が浅いまま終わってしまう。



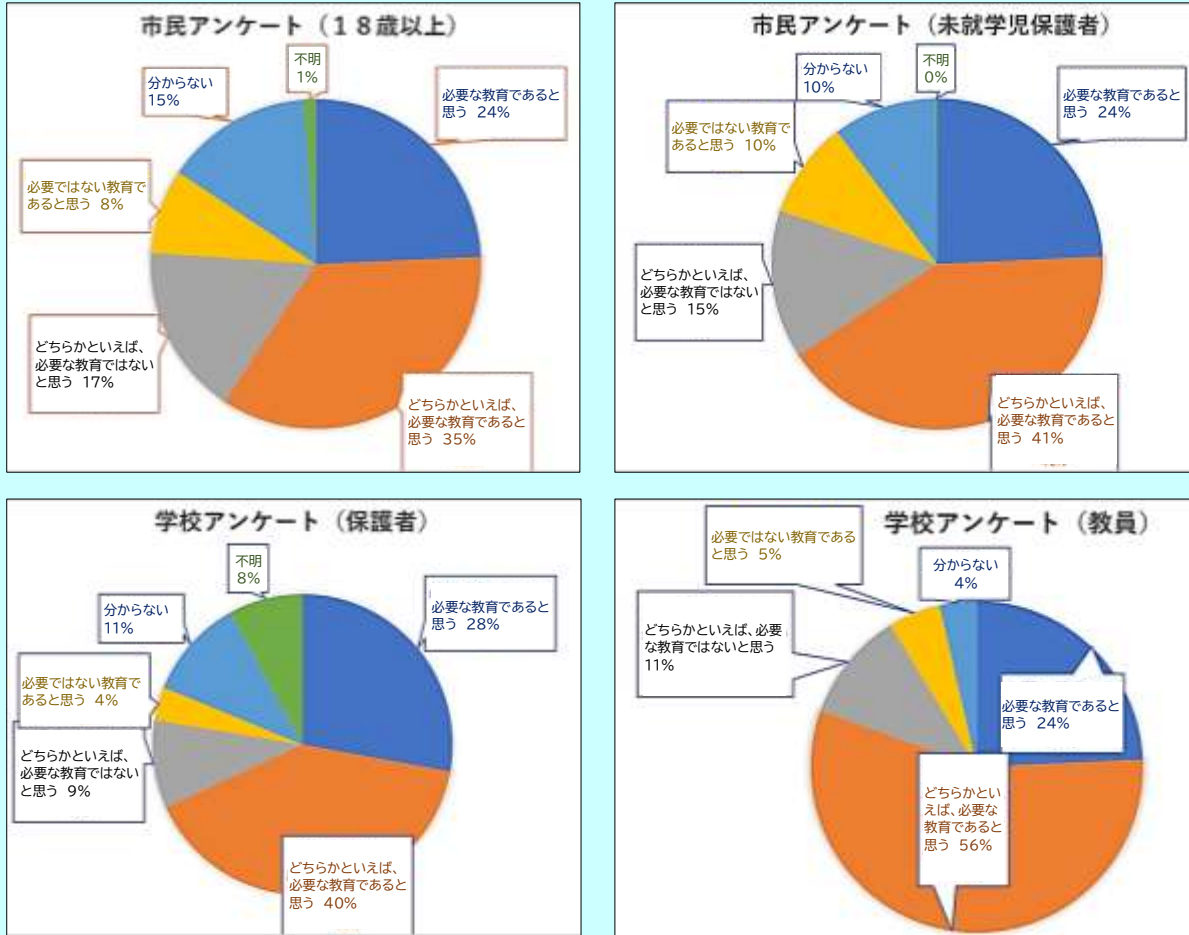
- ・教職員が人事異動で入れ替わっていくことなどにより、取組の内容が徐々に変化したり、取組が形骸化したりして、小学校から中学校への円滑な接続を目指すという当初の目的意識が薄れてきている状況が見受けられる。
 - ・小中連携の取組は、小学校と中学校のつなぎ目を円滑に接続していくことを目的として行われてきたことから、今日求められている児童生徒が身に付けるべき資質・能力について、9年間を見通して育成していくための工夫・改善が必要になる。
- ⇒ ★上尾市においても、これまで各学校が推進してきた小中連携の取組を生かし、9年間を見通した系統性・連続性のある「小中一貫教育」の充実に取り組むことが必要であると考える。

エ 「第3期上尾市教育振興基本計画」における「各学校種間の連携や小中一貫に向けた教育の推進」
「第3期上尾市教育振興基本計画」では、「目標Ⅰ 確かな学力の育成 施策2 各学校種間の連携や小中一貫に向けた教育の推進」を掲げ、小中一貫を見据えた教育課程の編成や各学校種間の協力と連携を推進することとしている。

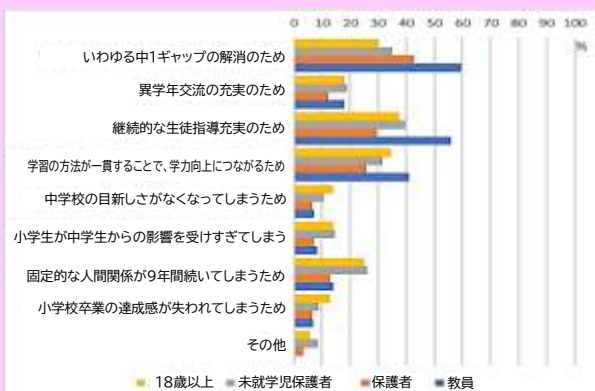
オ 「子供たちのための新しい学校づくりに関するアンケート」より

令和4年7月に「子供たちのための新しい学校づくりに関するアンケート」を実施した。市民アンケート及び保護者、教員を対象とした学校アンケートにおいては、小中一貫教育に関する質問を行っている。

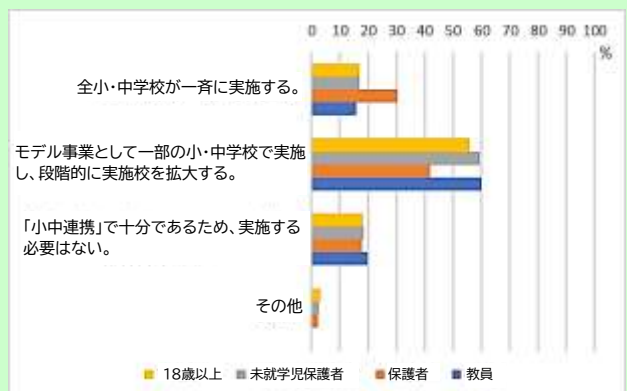
問1 小中一貫教育の取組を行うことについて、どのように思いますか。



問2 前問において、そのように回答した理由について、お考えに近いものを教えてください。



問3 本市において、小中一貫教育をどのように実施したら良いか、お考えに近いものを選択してください。



どの調査対象も、小中一貫教育は、「どちらかといえば、必要であると思う」が最も多く、次いで「必要であると思う」の順となった。理由についても、「いわゆる中1ギャップの解消のため」、「継続的な生徒指導充実のため」、「学習の方法が一貫することで、学力向上につながるため」が共通で挙げられている。

実施方法については、「モデル事業として一部の小・中学校で実施し、段階的に実施校を拡大する」が最も多く選択されている。保護者については、「全小・中学校が一斉に実施する」についても多く選択されていた。

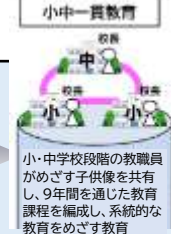
(2) 方針策定の目的

本方針は、国の動向やこれまで実施してきた上尾市の小中連携の成果と課題を踏まえ、小学校と中学校のつなぎ目だけでなく、9年間の系統性・連続性のある教育を推進するため、上尾市にふさわしい小中一貫教育についての基本的な考えを示すことを目的に策定するものである。



「連携」から「一貫」へ

～上尾市が目指す小中一貫教育のイメージ～



小中一貫教育の定義

小中連携教育のうち、小・中学校段階の教職員が目指す子供像を共有し、9年間を通じた教育課程を編成し、系統的な教育を目指す教育

小中一貫教育の必要性 ～「連携」から「一貫」へ～

< これまで行われてきた「小中連携教育」 >

小・中学校段階の教職員が、互いに情報交換や交流を行うことを通じて、小学校教育から中学校教育への円滑な接続をめざす様々な教育
《取組例》・入学前の部活動見学 ・中学校教員による出前授業 等



【 成果として 】

「中学校の学習や学校生活に見通しをもてる児童」が増加！



【 課題として 】

▲小6と中1の接続に関する取組がほとんどである。

⇒ 小中連携の取組は、小学校と中学校のつなぎ目を円滑に接続していくために行われているため、今日求められている9年間を見通した資質・能力の育成につながっていない。

《 課題の一例 》

▲不登校の増加 ▲学習意欲の低下 ▲勉強についていけない 等



「小中一貫教育」への深化

「9年間を見通した系統性・連続性ある小中一貫した教育の必要性」
小学校と中学校のつなぎ目だけでなく、9年間の系統性・連続性のある教育を考える

2 上尾市が目指す小中一貫教育

(1) 上尾市の小中一貫教育の目的

【上尾市立小・中学校における「小中一貫教育」の目的】
9年間における系統性・連続性のある教育を実現し、
児童生徒の「生きる力」を育成する。

～ 既存の小中連携の取組を生かして ～

(2) 上尾市における「小中一貫教育」推進の視点

上尾市立小・中学校における小中一貫教育の推進にあたっては、以下の5つの視点を重視する。

- ① 小中一貫教育に係る目標の設定
- ② 学びの連続性を確保するための教育課程・指導形態の工夫・改善
- ③ 教育活動における連続性の確保
- ④ 教職員間の連携・協働
- ⑤ 家庭・地域との連携・協力

(3) 小中一貫教育の実施により期待される効果

前項に示した5つの視点から小中一貫教育を実施することにより、以下のような教育効果が期待できる。

① 学力の向上

義務教育9年間を見通し、児童生徒の発達に即した系統性、継続性のある指導やいわゆる「中1ギャップ」の解消・緩和により学習意欲の高揚が図られ、学力の向上が期待できる。

② 開かれた学校による豊かな人間性や社会性の育成

小・中学校（小中）や小学校同士（小小）による児童生徒の異年齢集団の連携や地域の方々との交流を通して、集団の中での自己有用感や自尊感情が高まり、コミュニケーション能力や規範意識などの社会性が育ち、人との関わりが広がることが期待できる。

③ 中学校進学に対する不安の解消や進学への期待感の高まり

小学校高学年から可能な範囲で教科担任制を取り入れたり、共通した学びのルール等を設定したりすること等によって、中学校への接続が円滑になり、中学校進学に対する不安の解消や進学への期待感の高まりが期待できる。

④ 教職員の意識改革・指導力の向上

小・中学校の教職員が、中学校区の特性と課題を共有し、9年間で児童生徒を育てる意識をもち、教育活動を実践することにより、小・中学校間の文化の違いやそれぞれのよさを理解し合い、学習指導や生徒指導により変化が見られることが期待できる。

3 小中一貫教育の推進体制

(1) 上尾市全体で進める小中一貫教育

ア 全小・中学校で推進する取組

「小中一貫教育」推進の5つの視点に基づく取組の推進



これまで行ってきた小中連携の取組の「深化」「充実」「体系化」へ

各中学校では、地域や児童生徒の実態を踏まえて、創意工夫ある取組を進めていくが、これまで、上尾市の全ての小・中学校において大切にしてきた教育活動を生かしながら、児童生徒に身に付けさせる資質・能力を系統的に育むことを重視する。

以上を踏まえ、学びと育ちの一貫性を重視し、全小・中学校で推進する取組として、以下の3つの柱を設定し、上尾市全体で進める小中一貫教育の実現を図る。

「学びと育ちの一貫性」を重視した

全小・中学校で推進する取組

①小中一貫教育に係る目標の設定

小・中学校間で地域の児童生徒の状況について共通理解した上で、学校間での協議等を通じて、小・中学校9年間の「小中一貫教育目標」や「目指す児童生徒像」を設定する。

⇒ 小・中学校がともに「目指す児童生徒像」の実現に向け、発達段階等に応じた指導内容などを工夫することで、「生きる力」の育成を図る。

②発達の段階に応じた継続した児童生徒理解

小・中学校におけるそれぞれの指導方法の特性を教職員が相互に理解し、生徒指導、不登校へのきめ細かな支援等を充実させる。

⇒ 9年間の児童生徒の発達の段階に応じた指導を可能にし、校種を超えた継続的な児童生徒理解につなげることができるようにする。

③保護者・地域への啓発及び理解・共有の促進

児童生徒が中学校の卒業を迎えるまでに「どのような子供を育てていくか」という目指すべき姿を保護者や地域住民と共有する。

⇒ 小中一貫教育に係る教育課程に地域の特色を活かした効果的な小中一貫教育を推進していくことができるようにする。

イ 中学校区の特徴を生かした取組

「学びと育ちの一貫性」を重視した上尾市内全中学校区で推進する取組を共通の柱として、各中学校区で児童生徒の学びや育ちに関する課題等を共有するとともに、地域の実情等に応じて、以下の内容等についても検討し、各中学校区の特徴を生かした小中一貫教育を推進する。

各中学校区の特徴を生かした小中一貫教育の推進

① 教育の計画に関すること

- 「9年間の系統性の視点」での教育課程の捉え直し
- 学力・学習状況、生活状況等の分析による課題の共有
- 学習や生活の手引き等の作成
- 小中合同教職員研修会の実施 等

② 授業や児童生徒の活動に関すること

- 相互乗り入れ授業の実施
- 児童生徒の合同活動などの実施
- 系統性・連続性のある特別支援教育
- ICT教育の充実 等

③ 保護者や地域との関わりに関すること

- 関係団体との会議等の見直し
- 地域の教育力・外部人材の活用
- 学校運営協議会の小中合同実施
- 小中PTA間の定期的交流 等

(2) 上尾市教育委員会の取組

小中一貫教育の推進に当たっては、教育委員会と学校及び保護者、地域が、その理念について共有するとともに、小中一貫教育に関する効果的な取組事例等に関する調査・研究を着実に行うことが重要であることから、上尾市教育委員会として、以下の取組を柱として実施する。

ア 小中一貫教育の理念等の周知

- ・各学校との連携 保護者・市民向けのリーフレットの作成 等

イ 小中一貫教育推進組織の設置

ウ 小中一貫教育に関する研究委嘱の実施

4 小中一貫教育の評価・検証

小中一貫教育の充実、発展を目指すためには、各校における取組を以下の手法等を生かして、適切に評価・検証し、今後の取組に生かす「PDCAサイクル」の視点を取り入れ、着実に推進することが必要である。

(1) 学校評価の活用

(2) 学校運営協議会での熟議等の活用

5 学校間の立地に応じた小中一貫教育

★小中一貫教育の核★

義務教育9年間を見通した目標の設定と
その目標の実現のための指導の一貫性

「小中一貫教育」は、

- ・小中の教員が連携を一層密にし、ともに子供の9年間の学びや育ちをつなげること
- ・小学校と中学校が子供の理解や指導について、共通の姿勢をもち、切れ目なく子供の育ちを支援すること

などを目的に推進する。

「ハード面」のことでなく、「ソフト面」のこと。

★連携する小・中学校が、「目指す子供像」「具体的目標」「評価項目」「指標」等を共有し、協働する。

☆小中一貫教育は、児童生徒や教職員の相互の理解や交流を充実させることで、成果が生まれやすい。

☆児童生徒や教職員の相互の理解や交流は、学校の施設が近いほど促進され、とりわけ施設が一体化されると、日常的になり、小中一貫した教育がさらに充実する。

市内各地域における小・中学校の立地状況等に合わせた
最適な小中一貫教育を行うことが肝要

児童生徒間、教職員間の距離を縮め、交流を活発にすることで
理想的な小中一貫教育を実現する